

博多 213 次出土の近世窯業関連遺物について

太宰府市教育委員会 山村 信榮

1 遺物の概要と背景

本調査においては近世から近現代に相当する遺構面から7基の窯跡と灰原、窯関連の遺物を廃棄した溜まり状、土坑状の遺構が複数確認された。当該地が江戸後期から近現代にかけて素焼人形（土人形）製造した中ノ子家の地所であったことが知られており、同家が人形製造以前は七輪屋（陶師）として土師質土器の各種を製造していたことでも知られている。取り上げられた遺物を選別したところ、肥前系染付の供伴関係から土坑 1075 や 1145 は 18 世紀後半から 19 世紀前半の幕末期頃に位置付けられ、1334 等他のものはこの時期から明治前期に主体を持つものと考えられる。窯は窯 5 と 8 から化学呉須を用いた磁器が出土し近代まで下る可能性があり（廃絶後の混入も排除できない）、他の窯は江戸後期以降から明治期にかけてのいずれかの時期のものであろう。

2 土師質土器

出土した土師質土器には七輪（筒形・方形、単形・重形、平口・波口）、その部品である目皿、送風口の蓋、火鉢（筒形・方形、獸脚・蝶脚付、台付）火消壺、十能、焙烙、缶、槽、植木鉢などがあり、土師器には糸切底で内底面に黒斑が入る小皿。小皿にラッパ状に開く灯芯を付けた灯火具（平仄）などがある。これらには焼き上がりの色で黒、赤（褐色）、白の3種があり、胎土の質に粘土系のものとざらざらした砂地の2種がある。また、各器種にはおおよそ大中小程度の法量の別がある。未使用品や焼成時に破断したものが含まれ、窯場の焼成後に選別処分されたものが大半を占めるものと考えられる。土器の成形の道具として3足脚の付く俯瞰が円形の盆（台）状土器と、平瓦状の断面が弧を描く土師質土器（SK1075、SK1019 最下層出土）や切り株を表現した板状のもの（SK1142 出土）がセットの外型となり、七輪や風炉を生産したものと考えられる。盆（台）状土器の外底部に「長右衛門」「焼口」「口門」「治右口」「口長」「口番」「平」「中」傘に「丁？」ヘラ書きがあり、「長衛門」「口四郎」「正」「仁七」の印が確認される。

3 窯道具

窯道具と考えられる遺物には円形ないし方形の形状で厚さ 1.5cm ほどの粘土板で、縁に近い片側の寄った位置に 1cm ほどの孔があるものである。後者は継嗣家の方々が「メゲ」と呼び習わしているもので、焼き上がりの色相が白、赤（褐色）、黒のいずれかになっている。盆（台）状土器は成形時の型の台ないしは焼台、「メゲ」は窯詰め時点に製品を覆う蓋や炎の通りを調節する添え具として利用されていたもので、黒、赤（褐色）、白の3種があることは製品の色相の違いに合致しており、製品と同時に焼かれたものといえる。棒状の土製品と瓦類もこれらと供伴している。丸瓦や棧瓦には2次被熱を受けていたり、黒色の燻が焼き飛んで白色を呈すものもあり、これらも窯道具として利用されたものと思われる。トチンとサヤも見られ、少量ではあるがレンガが出土している。多量に出土したこれらのものと生活食器との出土量は比較にならず、圧倒的に前者の量が勝っておりほぼ未使用品であることから、先に記述した器物はこの場で焼成、生産されたものと見做される。

4 土人形・土型

人形は肌色を呈す素焼きのもので丸顔の御所人形の系譜をひく伏見系のもの、やや面長な博多系のもの、型を使わないものがあり、肥後・博多系のものには 4,50 センチを超える大型品が見られる。箱庭道具、ままごと道具は鉛釉が施され低火度焼成の陶器質である。製品としておぼこ、汐汲み、娘、八重垣、鯛車、童子、臼乗り童子、金太郎、恵比須、布袋、俵乗り大黒、笹野才蔵、若武者、鎧武者、義経、騎馬武者、力士立像、力士座像、太閤、西行、男雛、女雛、浦島、芥子人形、長太郎人形、棹猿、御幣猿、鯉、鯛、鮎、馬、狸、鶏、鳩、レリーフの鯛、人物、首人形、屋形、燈籠、橋などが見られる。

土型は厚さ3～4cmの橙褐色の硬質なもので、前後2枚の構造であり外面にヘラ描きで文字を入れたものがある。製品として布袋、三味線持ち大、福助中、猿、金太郎後頭部中、力士立像梅ヶ谷？大、中、頭巾女小、三番叟烏帽子童子、娘、鎧武者、加藤清正、首人形などが見られる。

5 各遺構の土人形と土型

(1) 江戸期の遺物

一定量の人形関係の遺物が出土した江戸期の遺構にはSK1020、1075、SK1145があげられる。遺物は肥前系染付の組み合わせから19世紀前半の遺物群に位置付けられ、明治期のものを含まないと捉えられるものである。土坑SK1075は土師質土器と人形類の廃棄土坑で土人形には伏見系の子ども恵比須、稚児、おぼこ、福助（小）、肥後系の大型の武者（太閤？、加藤清正）、力士（立像）の他、鈴持ち、太閤大、鎧武者、笠野才蔵？、浦島？、猿、狐、鳩、力士、娘、娘（小）、鯉or鯛、悪童子、恵比須、大黒小俵乗り、簞笥？、鯉、童子、三番叟、猿、神功皇后？の扇、大黒、大黒（俵乗り小）などがある。土坑SK1145は窯1の西側にあり窯に切られる形で検出された遺構で、土人形には童子、熊、猿、浦島？、力士、鎧武者があり、土型には金太郎、恵比須面、力士立像中、力士蹲踞、寿老人？、蜘蛛、鯛抱き、福助、子ども三番叟、布袋、力士が見られる。SK1075には伏見模倣の童子ものの古い系統と大型の武者もの新しい肥後・博多系統の両者がある。

(2) 明治期の遺物

当該前半期の遺構にはSE1059、1334、後半期のものにSK1043などがある。土坑SK1334は窯8の南西側にある明治前半期の遺構で、土人形には汐汲み大、娘大、鯛車、金太郎、布袋、若武者、鎧武者、義経、騎馬武者40,60cm、太閤、西行、男雛、女雛新例、御幣猿、鯉、鯛、鮎、馬、狸、鶏、鳩が見られ、土型には三味線持ち大、福助中、猿、金太郎後頭部中、力士立像（梅ヶ谷？）大、中、頭巾女小、三番叟烏帽子、娘、鎧武者が見られる。SK1059からは差し首式の学生の頭部が出土している。SK1043からは乃木希典と東郷平八郎と思われる日露戦争もののレリーフがそろって出土している。

5 中ノ子家と製陶業について

博多213次調査の地所には博多人形の創業家とされる中ノ子家が昭和43（1968）年まであった。中ノ子家は菩提寺であった博多片土居町宗玖寺の過去帳によれば、長子が「長右衛門」の名と陶師を継いできた。八代目長右衛門安兵衛（1765～1830）は大乗寺前町に住したが、次男長四郎吉兵衛（1796～1856）を文化5（1808）年に下祇園町に分家させ、共に人形製作を始めたとされている。製陶道具に残された印に「長衛門」「□四郎（長四郎か）」と見え両家が窯場としたものと理解される。慶応2（1866）年から明治4（1872）年の税台帳である『博多店運上帳』の大乗寺前町の項には陶師の存在はなく、当該地が製陶業者としての中ノ子本家、分家の共同工房とみられる。出土した窯道具としてのハマやトチン、箱庭具などの軟質陶器の存在から、素焼きの他に低火度の陶器生産も行っていたと考えられる。素焼き製品も黒色に燻した瓦焼きの製品も多く、窯は円筒型の窯ではなく一定の火度が得られ、燻しのコントロールができる焼成部に天井がある倒炎式のダルマ窯に近い構造であったことが想定される。窯1,2,4,7,8は燃焼部がロストル式の構造であり、これがその窯に該当する可能性がある。ロストルのない窯3と5は円筒形の空吹き窯の可能性があり時期差でなく機能差で使い分けがあったのであろう。化学呉須を用いた磁器が出土した窯5と8からは石炭灰が出土し、周辺には粉炭の堆積層があることから近代以降には積極的に燃料として石炭が利用されていたことがわかる。このような状況から石炭を伴う窯1,2,5,8は近代まで利用され、窯3,4,7はそれ以前の可能性がある。切り合いから窯7がロストル式では古く、3は空吹き窯で併用されていた可能性がある。その後ロストル式のものは窯4,1,2,8と造り替えながら明治前期まで使用された。遺物の出土状況から素焼人形と土師質土器は並行して焼成されたと思われる。その後、長四郎吉兵衛の3男、吉三郎（1838～1911）の代になると窯場の中心は本調査地の西隣地に移り、長男家の当該地は扇屋旅館と4男長六家（後六助家。人形製造）

の地所となった（SK1043 から絵皿と日露戦争時のレリーフ人形が出土し、本遺構群が検出されるまでの包含層には近代の素焼人形が含まれており、工房としての終焉は戦前頃まで考慮する必要がある）。西隣地の吉三郎の地所は子の市兵衛（1877～1946）の代には磁器が焼成できる連房式の本窯と素焼窯、試験窯などが操業され、市兵衛の子勝美（1918～2008）の代の昭和43（1968）年まで使用された。当該地所で発見された窯場は中ノ子家の安兵衛から吉兵衛、吉三郎（青年期）の代に亘る工房であったと考えられる。（窯の変遷案は本報告とは異なる。詳細はIV章まとめを参照。）

明治34（1901）年3月14日の九州日報記事には吉兵衛創業時は「伏見人形に擬して」製造を始め、文化年間に安兵衛の指示で肥後の職人大蔵、甚吉、亀吉を雇い入れており、SK1075に伏見模倣系統と大型の武者や力士ものの新しい肥後・博多系統の両者がある状況はこのような背景を表しているものといえる。

【参考文献】

- 「近世都市における窯業生産」『博多研究会誌(法哈噠)』第6号 1998年博多研究会
- 『博多人形沿革史』2001年博多人形商工業協同組合編
- 「博多遺跡群117次SX1201の素焼人形について」『博多76』2001年福岡市教育委員会
- 『熊本城跡遺跡群』2015年熊本県文化財調査報告 第303集熊本県教育委員会（新馬借B調査区とその西側の排水路工事立会）
- 『伏見人形の原型』伏偶舎・伏見人形窯元丹嘉 1976年六代目丹嘉大西重太郎、奥村寛純
- 『法性寺跡』2011年京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-19財団法人京都市埋蔵文化財研究所

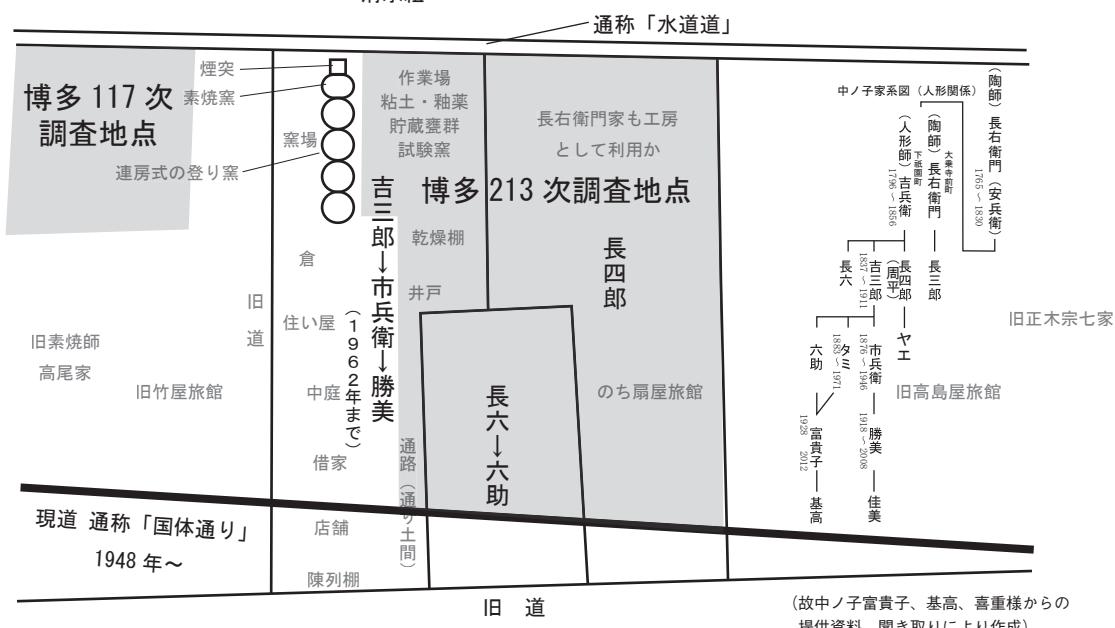
人形に関する中ノ子家略年表【江戸～明治期】

1808 文化5年	吉兵衛（長四郎）	父安兵衛（長右衛門）と共に土人形を作製
1822 文政5年		肥後の職人大蔵、甚吉、亀吉を雇用し、作品が大型化する
1850 嘉永3年		筋句人形を多量販売
		この頃、吉兵衛が藩の勤業製陶所（須恵）に派出する
1856 安政3年		吉兵衛没す
1864 元治元年	吉三郎	吉三郎が勤業製陶所に派出する→白磁風武者人形の作例あり
1868 明治元年		歌舞伎の役者人形を売り出す
1877 明治10年		第1回内国勧業博覧会に吉三郎、白水六郎門、松尾文左衛門らが出品
1877 明治23年		第3回内国勧業博覧会で「博多人形」の名が使用される
1895 明治28年		博多素焼人形同業組合が結成され吉三郎が組合長となる
1970 昭和45年		祇園町の中ノ子家の家屋を解体

清水組



空吹き窯
中ノ子富貴子・七隈工房
1998年当時



博多下祇園町の中ノ子家とその周辺図